

〔資料〕

# 昭和女子大学図書館蔵 『隠岐百首』

— 解題・影印・翻刻 —

齋藤 彰

## 【解題】

昭和女子大学図書館蔵『隠岐百首』(和九一・一四・四)。帙左上題簽に「隠岐百首」と書く。目錄カード有。外題は、表紙中央の金紙題簽(縦六・二糎、横一・五糎)に「隠岐院」と書く。内題「隠岐百首」。列帖装一冊。表紙は、緑色の流水に桜花紋斐紙。縦一五・三糎、横一七・四糎。江戸初期写。料紙は、藍色唐草菊の下絵雲母入り鳥の子。原装見返しは首に紅葉、尾に雲を描く。遊紙首一丁・尾一丁、墨付一四丁、全一六丁。本文は一面九行ないし十二行。和歌下句一字下り二行書。総歌数一〇一首。補記・見せ消ちがある。二六番歌が三五番歌の次に、三八番歌が三九番歌の次に、四七番歌が四五番歌の次に、九五番歌が九六番歌の次に、九八番歌が一〇〇番歌の次に移動する。冬・七十番歌の次に「此歌イニナシ 年月の可数(かそえ)は今年くれぬれとかきりあれともいとなみもなし」の一首が載る。雑・八五番歌「おきの海をひとりやきつるさよ千鳥なく音にまかふいその松かせ」は、ない。雑・九七番歌の次に、第三類本以下に切り入れられた「かきりあれはかやか軒端の月もみつしらぬは人の行すゑの空」の一首がある。異本校合が九首にある。

里人のすその、雪を踏分てた、わかためと若菜をそ摘つむ比イ(春・5)  
 哀にもほのかにた、く水鶏哉老のねさめに暁のイの空(夏・31)  
 なきまさるわかなみたとや色更る物おもふ宿の庭のむらはき萩イ(秋・43)  
 野邊そむる雁のなみたは色もなし物おもふ比露イのをきの里には(秋・47)  
 岡野への木のまに見ゆる槇の戸にたえ、かゝるつたの秋風くもイ(秋・50)  
 山もとの里のしるへのうす紅葉よそにもおしき夕嵐なしイかな(秋・54)  
 冬くれは庭のよもきも下萌をれてイてかれはの月に月そさひゆくしきイ(冬・57)  
 かそふれはことしの暮は知らるれとゆきかく程のいとなみもなし(冬・70)  
 過にけり年月さへそ浦めしきいましもかゝる物おもふ身ことイは(雑・83)

田村柳壺『後鳥羽院とその周辺』(笠間書院 平成一〇年一月)参照。  
 ただし、寺島恒世『遠島百首』の諸本と成立「『国語と国文学』八七―二、二〇一〇年二月号)に説く第二類本↓第一類本が妥当であると認める。和歌の有無の異同をみると、第一類本にある「沖つ浪」、「わけのほる」、「山姫の」、「よそよりも」、「染め残し」、「冬こもる末の寒けさ」、「置きわひぬ」、「都人」、「美保の浦を月とともにそ」、「よしやたた」、「誘ひゆかは」、「おきの海に我をや尋ぬ」、「水茎の」、「問へかしな誰かしわさとや」は、ない。第四類甲本(大阪大学国文学研究室蔵本)にない秋部の44「いたつらにこひ

ぬ日数はめぐりきていと、都はとをさかり行」(第二⑩・三類⑧本共通)がある。第四類甲本(大阪大学国文学研究室蔵本)にない冬部の68「今朝みれは」・69「おく山の」の二首がある。第四類甲本(大阪大学国文学研究室蔵本)にある秋部の「軒端荒れて誰かみなせの宿の月すみこしままの色は変はらし」は、ない。

歌序をみると、第三類本(宮内庁書陵部蔵伏・一八八)と一致して、39「思ひやれ真柴の扉をし明て独りなかむる秋のゆふへを」・38「秋されはいと、おもひを真柴かるこの里人も袖や露けき」である。第四類甲本(大阪大学国文学研究室蔵本)と一致して、夏部の「今はとて」が26の位置ではなく、35の次の夏部末尾にある。第四類甲本(大阪大学国文学研究室蔵本)と一致して、雑部の「故郷に」と「思ふ人」が入れ替わって、96「思ふ人」・95「古郷に」である。第四類甲本(大阪大学国文学研究室蔵本)と一致して、雑部の98「とへかしなほみや人の」が雑部末尾として『隠岐百首』の巻末にある。第四類甲本(大阪大学国文学研究室蔵本)の性格を認める。『大井河行幸和歌』の仮名序を末尾に附載する。平成二十一年五月一五日〜六月一三日、昭和女子大学光葉博物館における大学院文学研究科三十五周年記念昭和女子大学図書館貴重書展に展示された。

#### 凡 例

- 一、本翻刻の底本は、昭和女子大学図書館蔵『隠岐百首』(和九一・一四・四)である。
- 一、上段の写真と対照して、下段に原本の行取り、改丁通り翻刻する。
- 一、原本の行取り、改丁に準じ、丁数及びオ・ウの省略符号を1ウのごとく示す。
- 一、句読点を加えた。
- 一、新編国歌大観番号を付けた。

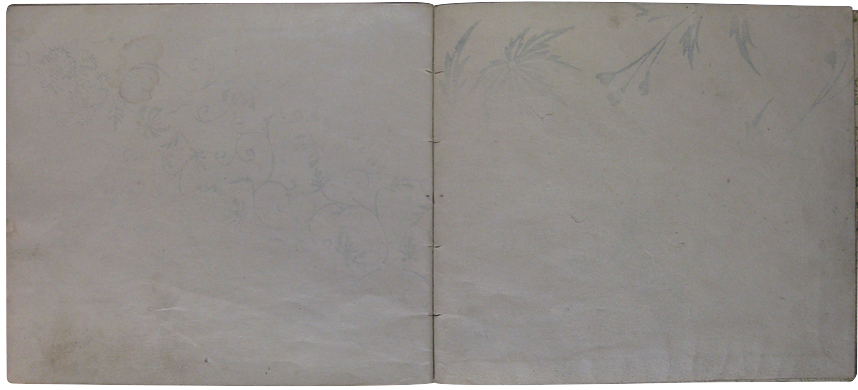
【影 印】

【翻 刻】



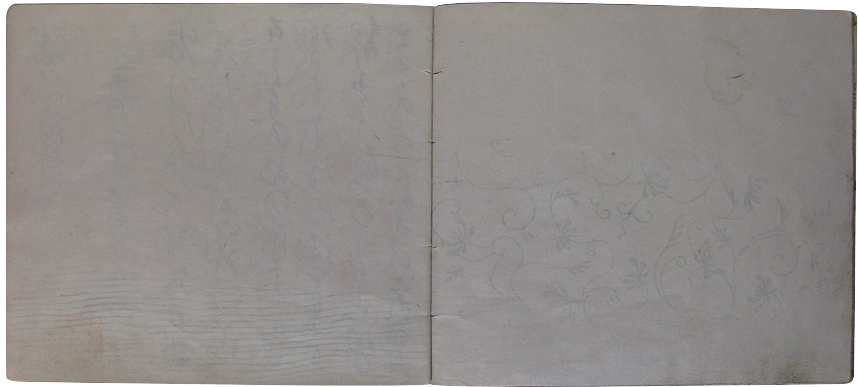
隠岐院  
(題簽)

「 表表紙



「表  
表紙遊紙才

「表  
表紙見返し



「1  
才

「表  
表紙遊紙ウ

隠岐百首

春二十首

霞りたかねとありあり影  
さすかに春の色をみる哉  
すみそめの袖の水に春立て  
ありしにもあらぬ詠をそする  
また水くゝる春のくれなる  
百千鳥さえつる空はかはらねと  
わか身の春そあらたまりぬる  
里人のすその雪を踏分て  
たゝわかためと若菜をそ摘  
ふる雪に野守かいほもあれば  
わかな摘むとたれにとはまし  
ねせりつむ野沢の水の薄氷  
またうちつけぬ春風そふく  
限あればかきねの草も春に逢ぬ



隠岐百首 (内題)

春二十首

- 1 霞行たかねを出る朝日影
- 2 すみそめの袖の水に春立て
- 3 ありしにもあらぬ詠をそする
- 4 また水くゝる春のくれなる
- 5 百千鳥さえつる空はかはらねと
- 6 わか身の春そあらたまりぬる
- 7 里人のすその雪を踏分て
- 8 たゝわかためと若菜をそ摘
- 9 ふる雪に野守かいほもあれば
- 10 わかな摘むとたれにとはまし
- 11 ねせりつむ野沢の水の薄氷
- 12 またうちつけぬ春風そふく
- 13 限あればかきねの草も春に逢ぬ

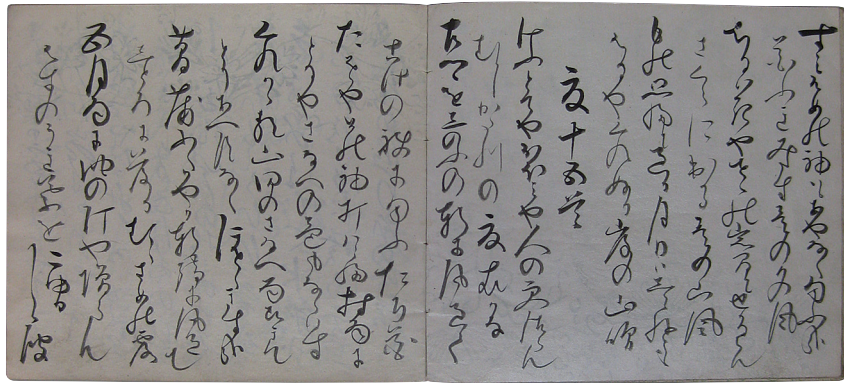
「 1ウ

「 2オ

つれなき物は苔ふかき袖  
春雨に山田のくろをゆく賤の  
みのふきみたす暮そ閑しき  
遠山路いく重もかすめさらすとて  
をちかた人のとふもなければ  
浦山し永き日影の春に逢て  
伊勢をの海士も袖やほすらん  
12 萌出る嶺のさわらひ雪消て  
おりすきにける春そしらるゝ  
13 をのれのみ春にあふかと思ふにも  
みねの桜の色そ物うき  
14 なかむれば月やは有し月ならぬ  
うき身そもとの春に更れる  
15 詠れはいとゝ恨もますけ生ふる  
をかへの小田を返す夕暮  
16 春さめも花のとたえそ袖にもる  
さくらつゝきのやまの下道  
17 やとからむかたのゝみのゝかり衣  
日も夕暮の花のゆふ風

「 2ウ

「 3オ



18 すみそめの袖もあやなく匂ふ哉

花ふきみたす春の夕風

19 ちる花やせゝの岩間にせかるらん

さくらに出る春の山風

20 もの思ふに過る月日はしらねとも

はるやくれぬる岸の山吹

夏十五首

21 けふとてやおほみや人の更つらん

むかしかたりの夏衣かな

22 古郷をしのふの軒に風過て

こけの袂に匂ふたち花

23 たをやめの袖打はらふ村雨に

とるやさなへの声もならはず

24 くれかゝる山田のさなへ雨すきて

とりあへすなくほととす哉

25 菖蒲ふくかやか軒端に風過て

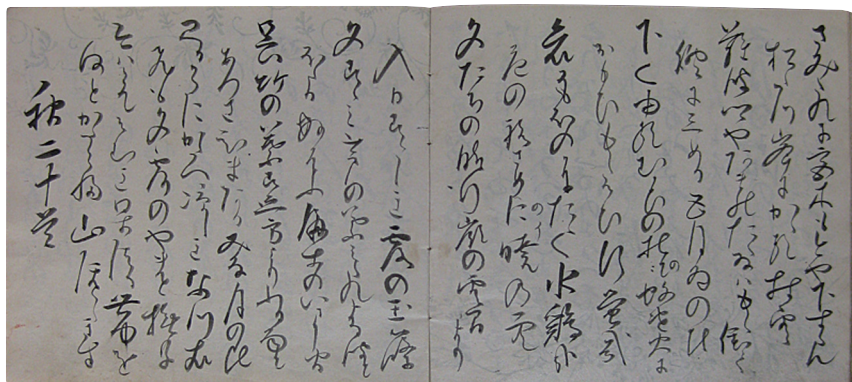
しとろに落ちるむらさめの露

27 五月雨に池の汀や増らん

はすのうき葉をこゆるしら波

「 4 オ

「 3 ウ



28 さみたれに宮木も今や下すらん

松たつ峯にかゝる村雲

29 難波つやあまのたくなはもえ侘て

煙にしめる五月雨の比

30 下くゆるむかひの杜に蚊遣火に

おもひもえそひ行螢哉

31 哀にもほのかにたゞく水鶏哉

老のねさめに暁の空

32 夕たちの晴行嶺の雲間より

入日すゞしき露の玉篠

33 夕すゞみ芦の葉みたれよる波に

ほたる数そふ海士のいさり火

34 呉竹の葉すゑ方よりふる雨に

あつさひまあるみな月の比

35 見るからにかたへ涼しきなつ衣

ひも夕露のやまと撫子

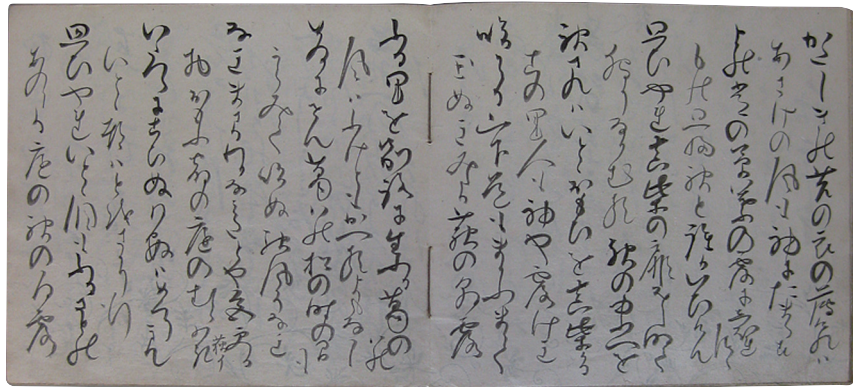
26 今はとてそむき果つる世中を

何とかならふ山ほととぎす

秋二十首

「 5 オ

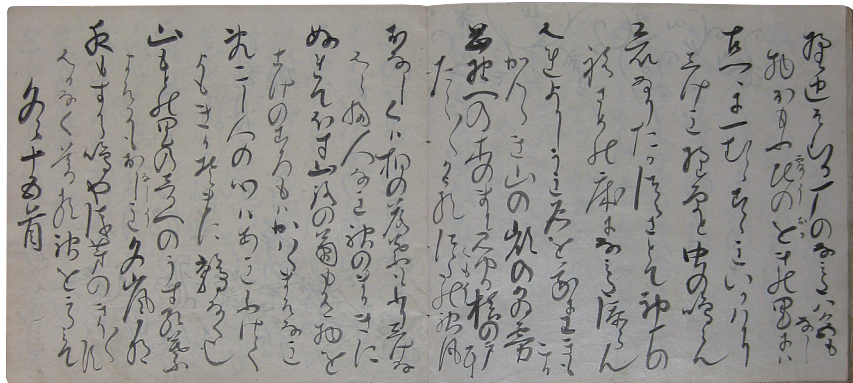
「 4 ウ



- 36 かたしきの苔の衣の薄ければ  
あさけの風も袖にたまらず
- 37 よの常の草葉の露にしほれつゝ  
もの思ふ秋と誰かいひけん
- 38 思ひやれ真柴の扉をし明て  
独りなむる秋のゆふへを
- 39 秋されはいとゝおもひを真柴かる  
この里人も袖や露けき
- 40 咲かゝる山下道もまかふまで  
玉ぬきみたる萩の朝露
- 41 ふる里を別路に生ふる葛の花  
風はふけともかへるよもなし
- 42 如何にせん葛はの松の時の間も  
うらみて吹ぬ秋風そなき
- 43 なきまさるわかなみたとや色更る  
物おもふ宿の庭のむらはき萩イ
- 44 いたつらにこひぬ日数はめぐりきて  
いとゝ都はとをさかり行
- 45 思ひやれいとゝ泪もふるさとの  
あれたる庭の秋の白露

「 5ウ

「 6オ

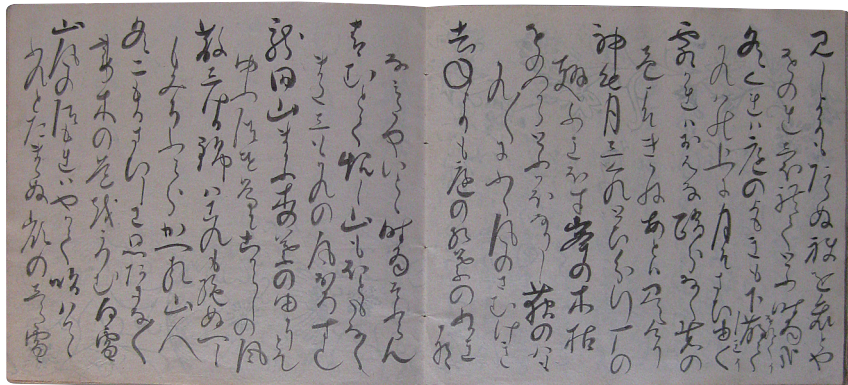


- 47 野邊そむる雁のなみたは色もなし  
物おもふ比露イのをきの里には
- 48 古郷に一むらすゝきいかはかり  
しけき野原と虫の鳴らん
- 49 哀なりたかつらさとて初雁の  
ねさめの床になみた添らん
- 50 是れよかしうき名を我にわきもこか  
かつらき山の峰の朝霧
- 51 岡野への木のまに見ゆる槿の戸に  
たえゝかゝるつたの秋風くもイ
- 52 おなしくは桐の落葉もふりしける  
はらふ人なき秋のまかきに
- 53 ぬれてほす山路の菊も有物を  
こけのころもはかばくまそなき
- 54 頼こし人の心はあきふけて  
よもきかそまに鞆なく也
- 55 山もとの里のしるへのうす紅葉  
よそにもおしき夕嵐かななしイ
- 56 夜もすから鳴や浅茅のきりくす  
はかなく暮る秋をうらみて

「 6ウ

「 7オ

冬十五首



56 見しよにもあらぬ袂を哀とや

をのれしほれてとふ時雨哉

57 冬くれは庭のよもきも下萌をれてイ

かれはの上に月そさひゆくしきイ

58 霜かれはおはな踏分なく鹿の

声こそきかねあとは見えけり

59 神無月しくれとひ分行雁の

翅ふきはす峯の木枯

60 をのつからとふかほなりし萩のはも

かれくにく風風のさむけき

61 去年よりも庭の紅葉のふかきかな

なみたやいと、時雨そふらん

62 青むとて恨し山もほともなく

またしもかれの風おろす也

63 龍田山まかふ木の葉のゆかりとて

ゆふつけ鳥にこからしの風

64 散しける錦はこれも絶ぬへし

もみちふみ分かへる山人

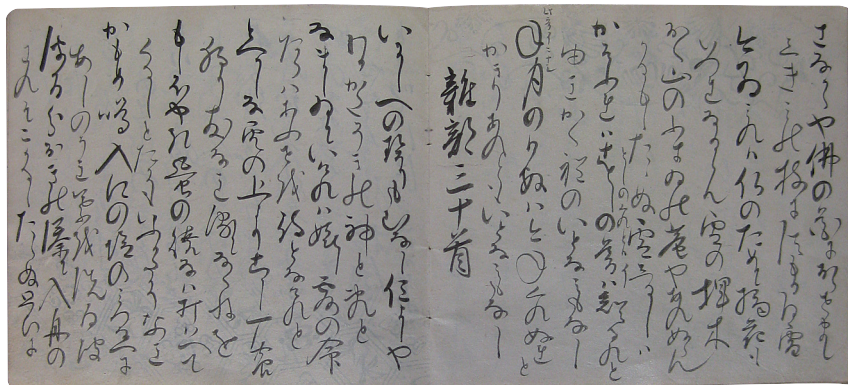
65 冬こもるさひしき思あさなく

妻木の道をうつ白雪

66 山風のつもればやかて吹はて、

ふれとたまらぬ嶺のしら雪

「 7ウ



67 さなからや佛の花におらせまし

しきみの枝につもる白雪

68 今朝みれば仏のために摘花も

いつれなるらん雪の埋木

69 おく山のふすみの菴やあれぬらん

かるも、たぬ雪しるしは

70 かそふれはことしの暮は知らるれと

ゆきかく程のいとなみもなし

此歌ニナシ  
年月の可数は今年くれぬれと

かきりあれともいとなみもなし

雑部二十首

71 いにしへの契りもむなし住よしや

わかかたそきの神と頼と

72 なましるにいければ嬉し露の命

あらはあふせを待となけれど

73 とへかした雲の上よりこし雁の

独り友なき浦になくねを

74 もしほやき蟹の焼なは打はへて

くるしとたにもいふかたそなき

75 かもめ鳴入江の塩のみつなへに

あしのうき葉を洗白波

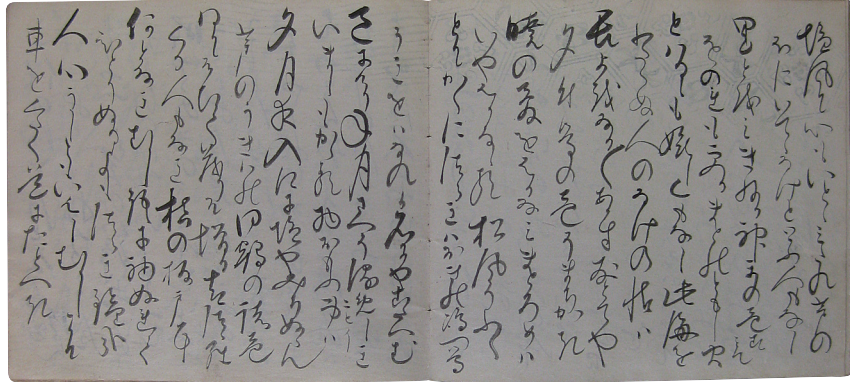
76 浪間よりおきの港に入舟の

われそこかるゝたえぬ思ひに

「 8オ

「 8ウ

「 9オ



77 塩風に心もいとゝみたれ芦の

ほにいてゝなけととふ人もなし

78 里とをみきねか神楽の声すみて

をのれも更るまとのともし火

79 とはるゝも嬉しくもなし此海を

わたらぬ人のなけの情は

80 長よをなかくゝあかす友とてや

夕付鳥の声そまちかき

81 暁の夢をはかなみまどろめは

いやはかなゝる松風そふく

82 とにかくにつらきはおきの嶋つ鳥

うきをはなれか名にやこたへむ

83 過にけり年月さへそ浦めしき

いましもかゝる物おもふ身はことイ

84 夕月夜入江に塩やみちぬらん

芦のうきはの田鶴の諸声

86 日にそひて茂りそ増る青つゝら

くる人もなき槓の板戸に

87 何となきむかし語に袖ぬれて

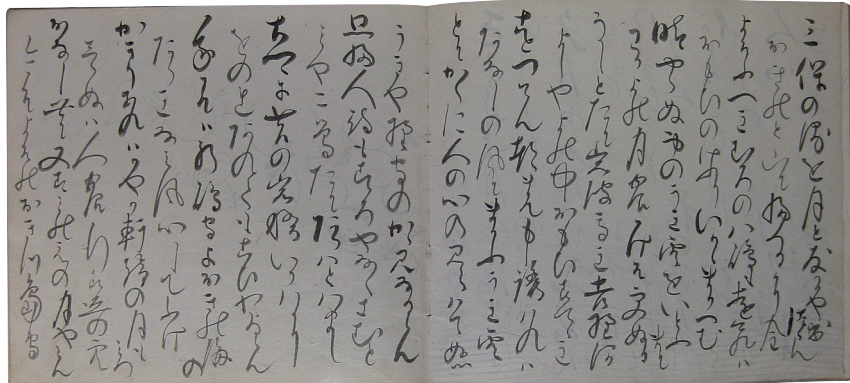
ひとりぬるよもつらき鐘哉

88 人心うしともいはしむかしこそ

車をくたく道にたとへき

「 10 オ

「 9 ウ



89 三保の浦を月と友にや出つらん

おきのと山に帰へるかり金

90 よそふへきむろの八嶋も遠ければ

おもひのけふりいかゝまかへむ

91 晴やらぬ身のうき雲をいとふまに

わかよの月のかけそ更ぬる

92 うしとたに岩波高き吉野河

よしやよの中おもひすてゝき

93 ことつてん都までもし誘はれは

あなしの風にまかふうき雲

94 とにかくに人の心の見えはてぬ

うきや野守のかゝみなるらん

96 思ふ人待もこゝろやなくさむと

みやこ鳥たにあらはとはまし

95 古郷に苔の岩橋いかはかり

をのれあれてもこひわたるらん

97 我こそは新嶋守よおきの海の

あらしなみ風心してふけ

かきりあれはかやか軒端の月もみつ

しらぬは人の行すゑの空

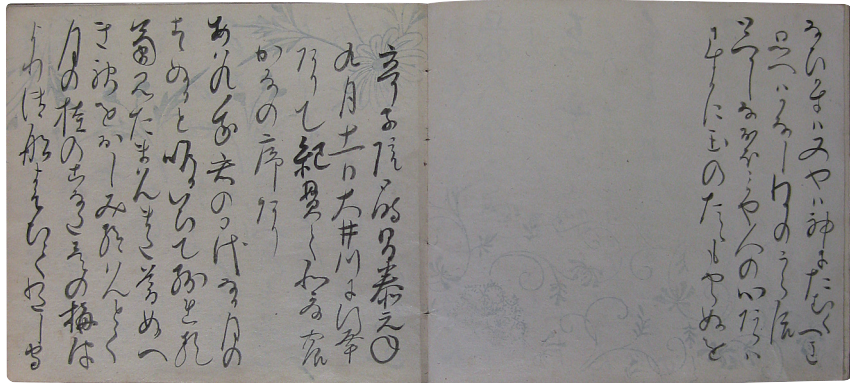
99 おなし世に又すみのえの月やみん

今こそよそのおきつ嶋守

「 11 オ

「 10 ウ





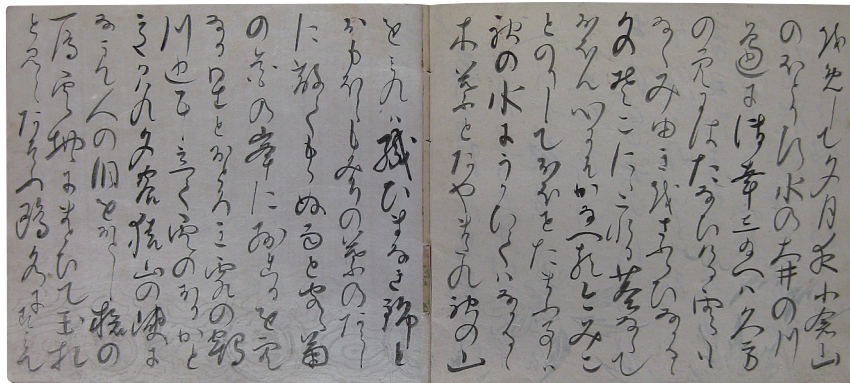
100 なひかすは又やは神にたむくへき  
 思へはかなしわかのうら浪  
 98 とへかしな おほみや人の心あらは  
 さすかに玉のたえもやらぬを

亭子院御時、昌泰元年  
 九月十一日大井川に行幸  
 ありて、紀貫之和哥の  
 かなの序あり。  
 あはれ我君の御代、なか月の  
 こゝぬかと昨日いひて、残れる  
 菊見たまはん、また暮ぬへ  
 き秋をおしみ給はんとて、  
 月の桂のこなた、春の梅津  
 より、御船よそひて、わたし守

(六行分空白)

「12オ

「11ウ

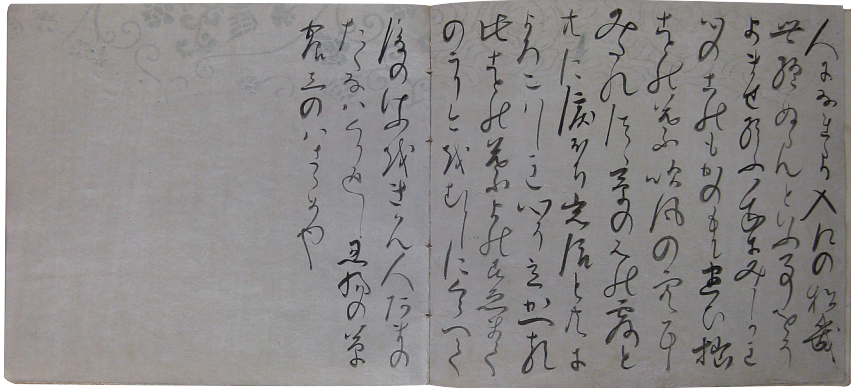


をめして、夕月夜小倉山  
 のほとり、行水の大井の川  
 邊に御幸し給へは、久方  
 の空にはたなひける雲も  
 なく、みゆきをさふらひ、なかるゝ  
 水そこにゝこれる茎ならて、  
 おほん心にそかなへる。今みこ  
 とのりしておほせたまふ事は、  
 秋の水にうかひては、なかるゝ  
 木葉とあやまたれ、秋の山

をみれば、織ひまなき錦と  
 おもほえ、もみちの葉のあらし  
 に散て、もらぬ雨と聞え、菊  
 の花の峯に残れるを、空  
 なる星とおとろき、霜の鶴  
 川辺に立て、雲のほるか  
 うたかはれ、夕の猿山の峽に  
 なきて、人の泪をおとし、旅の  
 馬雲地にまとひて、玉札  
 と見え、あそふ鷗水にすみて

「12ウ

「13オ

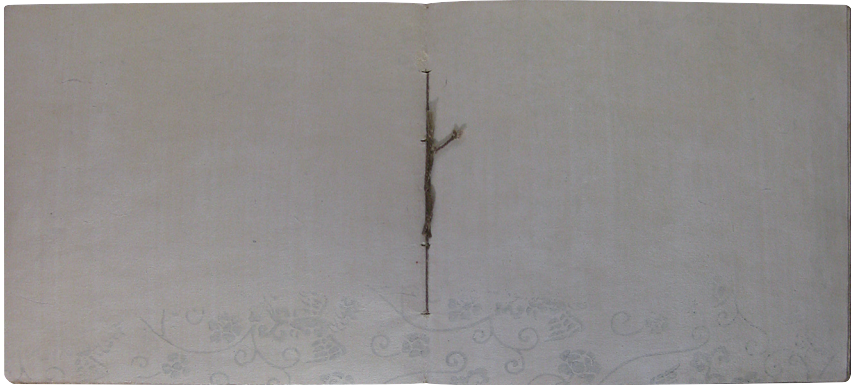


人になれたる、入江の松幾  
 世経ぬらんといふ事をぞ、  
 よませ給ふ。我等みしかき  
 心の、このもかものに迷ひ、抽  
 ことの葉、吹風の空に  
 みたれつゝ、草のはの露と  
 共に、涙おち、岩浪と共に  
 よろこはしき心を立かへる。  
 此ことの葉、よのすゑまで  
 のこり、今をむかしにくらへて、  
 後のけふをきかん人、あまの  
 たくなはくり返し、忍ふの草  
 のしのはさらめや。

「13  
ウ

(七分分空白)

「14  
オ



(白紙)

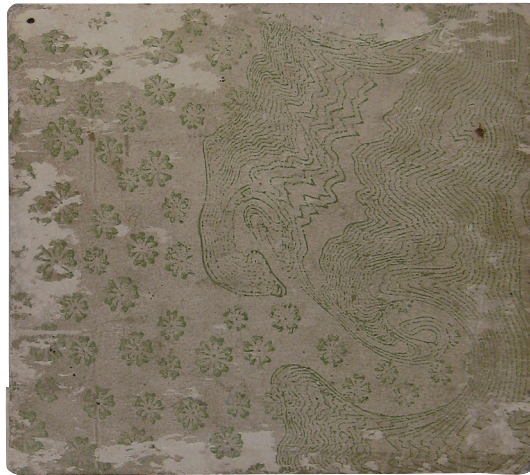
「14  
ウ

「裏表紙遊紙オ



「裏表紙見返し」

「裏表紙遊紙ウ」



「裏表紙」

附記 資料調査に際してご配慮いただき、影印・翻刻を許可してくださった昭和女子大学図書館に深謝申し上げます。

(さいとう あきら 日本語日本文学科)